

## フォーラムを終えて

北海道東海大学芸術工学部デザイン学科助教授 三上 純

今回のフォーラムは「住宅とインテリア」というテーマのもとに、木や木材の効果的な活用の方を探ろうというものでした。木を選択し、製品や空間を作りだすお立場から鈴木、清水、上山の3氏、木を供給する側から渡部氏の計4名が参加され、それぞれの専門領域の現場の声を聞かせて頂きました。ご多忙の所フォーラムへの参加を快諾され、貴重な講演とディスカッションを頂きましたことに深く感謝申し上げる次第です。

コーディネーターとしての役目とも思いますので、まずパネリストの方々のスピーチの要点を簡単に紹介したいと思います。

札幌で活躍中の鈴木氏からは数々の住宅の設計例から、「木」の具体的な使用例と同時に、北国の木造住宅の空間が扱い次第でずいぶん豊かになるという好例が提示されました。特に木サッシュの大きな開口部と、吹抜の大空間が印象的だったと思います。

清水氏の発表は木をふんだんに使った家具の自社製品を中心に、ディテールやもの作りの心まで入り込んだものでした。合わせて、資源立地型から脱却し、多様化するニーズに答えようと積極的に取り組んでいる旭川市の家具産業の現状が説明されました。

上山氏からはまだ一般にはなじみの薄いインテリアコーディネーターとしてのお立場から、建築から家具まで幅広く関わっておられる臆大な業務の紹介をして頂きました。さらに豊かな生活の在り方が熟っぽく語られ、数多くの映像での資料提

供がありました。



渡部氏からは当世建築用製材事情とでもいいますでしょうか、構造材、内外装材などに分類してのわかりやすい説明がありましたが、折々に製材の規格化の立ち遅れや、木構法の統一化のすすめなど示唆に富んだご指摘も含まれていたように思います。

総括すると「今、住生活の現場では何が求められているか」という問題提起と、「そして今後どうあるべきか」という将来展望との二つの内容を軸に、それぞれのお立場で、木との関わりという観点からの御提示ということでまとめられるように思います。

旭川市は上等な広葉樹の集散地であり、文字通り「木で生きている街」です。景気動向が拡大傾向にあるとはいうものの、業界にはまだまだ取り組むべき問題が山積みされております。会場を概観したところ木材業界、建築インテリア業界、エンドユーザーと各界からの聴講者があったようですが、それぞれにとって示唆深いフォーラムであっ

たと考えている次第です。

さて、今回のフォーラムの参加に当たり、私なりに考えたことを簡単に述べさせていただきます。

北海道では新設住宅の減少傾向と木造率の低下傾向（昭和50年80%だったものが昭和63年には55%）という、いわゆる木離れ現象が続いております。この現象にどう対処すべきか考えてみたいと思います。

80年代は多様化の時代でした。人間の価値観が複雑化して来たわけですが、共通項をくぐれば「生活をエンジョイし、モノを楽しむ時代」であるといえます。また機能主義・合理主義優先の時代から精神主義つまり「感性の時代」に突入、量の充足から質（ハイクオリティ）の充足へとはっきりした現象が見られます。いわゆる「本物指向の時代」を迎えたわけです。今後の木材を取り巻く様々な問題はこの時代背景を避けて通れないと思います。このような生活の変化や多様化をユーザーがどのように受け止め、反応しているかという観点からパネリストの方々にも質問させて頂きましたが、ここではデザインや設計に関わっている私個人の立場から述べてみたいと思います。

木材関係者からは木の復権を望む声日々高まっていますが、木という素材を考えるには「バランス感覚」が必要だというのが私の持論です。

安かろう悪かろうの時代は終わりを告げ、美的満足度の度合いが価格の指標になってきました。よく内外装材としての木の「材質性」が話題になります。フローリングを例にとると、視覚・触覚性、衛生性、健康性などからみておそらく最高の素材だと思っわけです。しかし残念ながら高い。それでも一点豪華主義というのでしょうか、家中の床にナラムクのフローリングを敷いた例はいくつも見てきました。外壁、サッシュ、玄関ドア、浴室の壁なども、若い世代ほど木の材質感を求める傾向があります。本物の良いものを求めている

のです。問題は需要に答えるような「モノ」がないということです。あっても高価なものになる。価格と美的満足度のバランスが折り合わないわけです。

他の建築素材とのバランスも大事です。北欧の建築などに好例があるのですが、一様に木の使い方が上手です。しかし、よく見ると何でもかんでも木ではないのです。レンガやコンクリート、プラスチック、鉄骨、布地などとの組み合わせ方、色彩や塗装の兼ね合いが実にうまい。そして、樹種はあまり混用していない。つまり、木は他のどの素材とでも合うが、使うべき所に「木をもらしく」すっきりと使い切るところにコツがありそうです。適材適所のバランス感覚ということでしょうか。木の価値を決める尺度は節の有無や木目の美しさだけではないのです。

今一つは使う場所、内と外のバランスです。とかく木という素材は構造材を別にすれば、仕上げ材としての内装材に可能性を求めてきたような気がします。これからはアウトドアでの使い方に販路がみいだせそうです。内装材としての木はともすれば木目や節を気にしなければならず、あるいは逆に「木目がうるさく」敬遠される向きもあったのですが、アウトドアでこそ大らかな大量使用の可能性がありそうです。ウッドデッキ、フェンス、カーポート、パーゴラ、プランター、遮音壁などの用途が考えられます。

最後は私の専門領域ではないのですが、業界内部のバランス感覚とでもいいたいでしょうか、使って貰う側、使わせる側、選ぶ側同士のネットワークがバランス良く有効に働いていないように思うわけです。この件に関しては、渡部氏のご意見に含まれていたような気がしますので省かせて頂きましょう。

幸いなことに最近木に対する見直しも徐々に高まってきました。今回のサブテーマである木材の効果的な活用という視点に対して、多少なりとも参考になれば幸いです。